



talk! talk! talk! 漫画家・新谷かおるさん



漫画家

新谷かおるさん

「ファントム無頼」「エリア88」をはじめとする数多くの名作漫画を生み出してきた漫画家の新谷かおるさん。リアルな描写や魅力的なキャラクター、精緻につくり込まれた壮大なストーリーなどが

年齢や性別を超え、多くのファンを惹き付けている。

そんな名作を生み出すための道具のひとつとして選ばれたのがニコンのカメラたちである。長年取材で愛用してきたというカメラへの思いとは？漫画家ならではの写真のとらえ方とは？カメラの思い出も交えながら、貴重なお話を語っていただいた。

プロフィール

しんたに・かおる。1951年、大阪府豊中市生まれ。高校卒業後、りぼん新人漫画賞に佳作入選したのをきっかけに、1972年、りぼん秋の増刊号に掲載された「吸血鬼はおいや?!」で漫画家デビュー。山岸涼子、松本零士などのアシスタントを経て、1977年に独立。翌1978年に少年サンデーで連載を開始した「ファントム無頼」がヒットし、一挙に注目を集める。続けて「エリア88」「ふたり鷹」を発表、いずれも好評を博し、第30回小学館漫画賞を受賞する。また、「クレオパトラD.C.」「砂の薔薇」などで青年誌にも連載を開始、その後も数多くの名作を発表し、幅広いファンからの支持を得る。現在はコミックフラッパー（メディアファクトリー）で「刀神妖緋伝」を連載中。

戦記もの、レースもの、また魅力ある女性を主人公とした作品の人氣が高く、リアルな描写力には定評がある。また、個性的なキャラクター、人間ドラマを織りまぜた奥深いストーリーに魅了されるファンも多い。

失われた青春の1枚が一眼レフカメラを持つきっかけに

これは.....すごいですね。カメラとレンズがこれだけズラリと並べられていると圧巻です。

いやあ（笑）。今回、あらためてニコンのカメラを出してみたのですが、自分でもけっこう持っていたんだなと思いましたよ。一番前で座ぶとんに座っているのが最近買ったS3の復刻版ですね。でも実は、S3のブラックボディが出ると聞いたときは、少し複雑な心境でしたよ。欲しかったレンズ、1、2本はおあずけになりますからね。でも出ると聞いてしまったからにはもう、触手が動いてしまって。すぐに「1台予約します」と言っていました。

きちんと座ぶとんにまで座らせていただきましてありがとうございます。先生がはじめてカメラを手に入れたのはいつ頃なんですか？

小学生の頃からカメラは好きで使っていたのですが、自分で稼いだお金で買ったというのは漫画家になってからです。ずっと欲しかったニコンFブラックをまず買ってきて、そのあとは、F2、F3、F4.....と順番に揃えていきました。

ニコンには何か特別な思い入れがあったのですか？

ありますね。特にブラックボディというのは、持っているだけで自分が強くなれるような、そんな憧れの機種でしたから。これをぶら下げて歩いているときには、僕は無敵だ！という変な興奮状態になるカメラですよ。子供の頃は親父の持っていた二眼レフカメラなどを使っていて、とりあえずフィルムをつけてガシャガシャいじっているという状態でしたが、当時はそれで満足していたんです。でも中学生のときから、やっぱりニコンの一眼レフカメラが欲しいと強く思うようになりましたね。

それは何かきっかけがあったのですか？



ええ、忘れもしません、中学3年生のことです。当時、私が密かに思いを寄せていたすごくかわいいクラスメイトがいたんです。春に『新入生を迎える会』という学校の催しがありまして、その中で新入生に向けて各部活動の紹介をするのですが、彼女は体操部でしたから、その会でスポーツタードを着て踊ることになったのです。当時の僕にとってはものすごい衝撃でした（笑）。

そうしたらなんと先生から、「新谷君、カメラを持っているなら写真を撮ってこない？」って言われたんですよ。千載一遇のチャンスが巡ってきた！と大喜びだったんですが、僕の持っているカメラは、フラッシュもついていない親父の二眼レフカメラだったので体育館の中で動き回る彼女を撮ることはできなかったんです。

せっかくのチャンスをふいにしてしまったんですね。

そうなんです。そうしたら後から、「僕が撮ってあげるよ」と言って一眼レフカメラを持ってきたヤツがいたんですよ！フラッシュをバンバン光らせて彼女を撮っている姿を見まして、そのときから一眼レフカメラに対して深い思い入れを持つようになったわけです。「こうしたら一眼レフカメラの中でも最高峰のニコンを持ってやるんだ」と誓いましたね。青春の1枚を失ってしまった傷は深いですよ。

もしそのときに彼女を体育館の外に連れ出して、「1枚撮らせてください」という勇気が僕にあったなら、確実に漫画家になっていませんでした。写真を撮ることに味をしめてしまって、きっとカメラマンの道へ進んでいましたよ。僕にとってはあの日が人生の分かれ目だったのかもしれない（笑）。。



インタビューのため先生の仕事場に訪れると、机の上にたくさん並べられたニコンカメラがお出迎えてくれました。一番手前がS3ブラック復刻版。

『読んだとき「これだっ!」と思った』 影響を受けた少女漫画の世界

漫画家の道へ進もうと思ったのも、何かきっかけがあるのですか？

いえ、それは自然な流れだったと思います。小さな頃から飛行機が好きで、パイロットになるのが僕の最初の夢でした。ところが小学生の頃から目が悪くなってしまって、その夢をあきらめなければならなくなりました。それでも飛行機は好きでしたから、近所にあった伊丹空港に出かけてはずっと飛行機の絵を描いていたんです。そのうち、飛行機だけでは物足りなくなって、隣にキャラクターを描き足すようになり、そうすると今度は話を付けたくって.....高校生のときには漫画家になると決めていました

ね。

もともとは少女漫画家を目指していたとおうかがいしたのですが。

そうなんです。実はデビューは少女漫画でしたから。僕が中学生の頃.....ちょうど東京オリンピックを過ぎたあたりでしょうか、それまで鉄腕アトムのような児童向け漫画を載せていた少年誌に、さいとうたかを先生(※注1)をはじめとする劇画の漫画家が登場するようになったんです。ディズニーや鉄腕アトムで育った僕には、劇画独特のリアルな描写は刺激が強すぎたんですね。なかなか馴染むことができませんでした。

ちょうどその頃、友達の家で妹さんが読んでいた少女誌をたまたま見たんです。そこに水野英子先生(※注2)の『白いトロイカ』という作品が載ってまして、それを読んだとき、「これだっ!」と思ったんです。絵は洋画のようでしたし、内容もただのメロドラマではなく、きちんとした歴史的背景も含めてストーリーが展開していた。当時の僕の目には、刀や銃を振り回している少年誌より、ずっと魅力的でカッコよく映ったんです。

それからは少女漫画に夢になった。

そうですね、コロっと少女漫画へ転びましたね。少女漫画のように、ドラマづくりを一生懸命やろう、それから女性を可愛く描こうと思いました。当時の少年誌というのは、女性キャラクターの存在をぞんざいに扱っていたんです。主人公はいるいるな服装をしているのに、お母さんやお姉さんなどはいつまでたっても同じ服装と同じ髪型のまま登場する。一方少女漫画では、学校から帰って制服から私服に着替え、髪型を変える。季節が変わればその季節に合った服装をする。そうやって着替えていくことが人間として当たり前なんです。当時はそんな細かいところにグズグズこだわるのは男らしくないという風潮もあったんです。“女性は細かいことが好きだから、だから洋服に細かいレースを描いたりするんだらう”ということではないんです。漫画の演出方法のひとつとして、その技法を持っているということなんですよね。

漫画の演出というのは?

その漫画をリアルに見せるための演出です。少年誌が肉体と肉体のぶつかり合いという、力を表現するためにリアルな方向へ進んでいったのと同じように、少女漫画の場合はその世界観、主人公のいる環境をよりリアルに描く方向に進んだのだと思います。

※注1 とうたかを=1956年、『空気男爵』で漫画家デビュー。その後、当時の貸し本屋ブームにのり、青年層に向けた新しい娯楽作品として、漫画ではない“劇画”として自らの作品を確立させ、人気を築いてゆく。代表作に『ゴルゴ13』『鬼平犯科帳』などがある。
※注2 水野英子=1956年、手塚治虫お墨つきの“天才少女”として漫画家デビュー。壮大なストーリーとテンポを生かした独自のスタイルを持ち、その後の少女漫画界に大きな影響を与える作品をつくり続けた。代表作のひとつである『白いトロイカ』は、1964年から週刊マーガレットで連載、ロシア革命を背景に繰り広げられる、愛と戦いの物語。少女漫画としてはじめて史実を描いた衝撃的な作品で、大人気となった。



『エリア88』(写真は、メディアファクトリーから1999年11月発行となったもの/本体590円+税)1979年~1986年 少年ビッグコミックで連載された新谷先生の代表作のひとつ。“エリア88”と呼ばれる外人部隊で、傭兵パイロットとして戦うことを強いられた主人公が、様々な葛藤を繰り返しながら自由への道を切り開いてゆく物語を、壮大なスケールで描いている。

漫画の資料写真は必要不可欠 「自分で撮影した写真を使って描くのが一番です」

先生は漫画の取材に行くときには、カメラを持っていかれるのですか?

はい、必ず持っていきます。撮影した写真を見ながら漫画を描きますから。だから、僕にとつての写真とは、漫画の資料という位置付けが大きいですね。海外旅行に行っても、現地のポストだとか車だとか、普通の人から見たら、なんてつまらないものを撮っているんだろうと思われるようなものばかり写していますよ。

パリの話を描こうと思ったとき、たとえばエッフェル塔なら他の人が撮った写真がいくらでもありますから、それを参考にすることができます。でも、男が靴音を響かせて走ってくるシーンを、その男の足元のアップで描こうと思ったら、どうしてもそのコマに描き込むパリのマンホールが必要になるんです。だから僕はマンホールの写真を10枚も20枚も撮影するんです。



イスラエル旅行の際に撮影された写真。「漫画に使うかどうかは別として、どこに行ってもその国のバスやパトカーなどは撮っておきたい」と先生。



エルサレムの街の中。エルサレムにどのような家が並んでいるかを記録するために撮影された。

マンホールひとつにも、資料写真は必要なのですね。

これも、いかにリアルに見せるかということにつながると思うんです。漫画というのは絵空ごとですから、極端に言えば資料がなくても、全て想像で描いてもいいんですよ。王子様やお姫様、宇宙人だって出てくる世界ですからね。でもそれではダメなんです。それをやってしまうと完全に嘘っぽい話になってしまうんです。嘘っぽいと感じると、読者が読んでいて違和感を感じてしまう、そこでストーリーがストップしてしまう、そうするとこの漫画はもう負けなんです。フィクションのストーリーを、あたかも現実にあるかのように見せることが大事なんです。

先生の作品は、ストーリーのリアリティもさることながら、そのスケールの大きさに魅力を感じます。

ストーリーには面白さが必要ですから、あきらかにありえないことを描かなければダメなんです。町工場からヒョコッと出てきた車乗りが、ル・マン24時間(※注3)で勝てるわけがないんですよ。でもそれが漫画ですからね。99の嘘を描いても、最後の1の真実ですべてを本当に見せるというのが漫画家の腕だと思えます。でも失敗すると、99の真実を描いているのに最後の1の嘘ですべてが嘘になってしまうこともある(笑)。

なるほど。そのためにも漫画の資料写真というのはとても重要なんですね。

毎回描くときには、最低限の資料は絶対に用意するようにしています。でも、資料写真を渡されて、それをそのまま鵜呑みにして転用してしまうのはまずいんです。その資料を漫画の画風に合わせてデフォルメして描いたりしますから、その資料を理解してから描かないと、まったくの嘘を描いてしまうこともあります。だからやはり、自分で撮影した写真を使って描くのが一番いいですよ。

これまでにどんな場所に取材に行かれているのですか?

いろいろな所に行きました。航空機の話やモータースポーツの話を描いているところは、自衛隊の基地やサーキット場などに頻繁に取材に行っていました。自衛隊の基地などは、もう顔パス状態になっていましたから、ある程度出入りも許されていました。滑走路の端で三脚を立てて撮影してもあまり文句を言われなくなりました(笑)。そのあたりは、漫画を描いていてよかったなあと思えましたね。



切り立った崖を撮影。「エリア88あたりのワンシーンに登場しそうな感じですが、ここに行ったのは連載が終わった後」だとか。



イスラエルにある死海付近で撮影。広い荒野に延々と続いてゆく道路。これも、どこかのワンシーンに登場しそうな景色だ。

取材で苦労したことなどはありますか？

現在は行くことも少なくなりましたが、モータースポーツの取材のために鈴鹿サーキットの山の中を10kgクラスのカメラバックを2つほどかついで歩きまわったことですかね。30代の頃はまだよかったです。40代になるとさすがにね.....(笑)。モータースポーツだと撮影のチャンスは一瞬ですから失敗は許されません。シャッターチャンスを逃すまいと大きな三脚と600mmから800mmぐらいのレンズ、それから予備の機材とバッテリー、持てるものは全部持っていかうという感じですから、現地ではもう大騒ぎになるわけです。

取材には主に、どのカメラを持っていかれるんですか？

F5、D1、D100ですね。今はD1で撮影することが多いかもしれませんが、デジタルカメラというのは、資料写真を撮る仕事のカメラとしてはとてもいいんです。撮った後、必要のない写真データはその場で削除し、コンピューターで必要なものだけ出力して、アシスタントにパーッと配って資料にする。漫画家にとっては写真はあくまで補助ですから、気軽に利用できるのがいいんです。でも、そういう意識で撮影をしていますから、フレーミングなどが雑になってしまったり.....まったく上達しないんですよ(笑)。写真をそのまま描き込むことはまずないですし、漫画家ですから紙の上でいくらでも自由に手を加えていけるんです。

被写体を見る目というのは、常に資料の対象を見る目なのですね。

そうです。普通はファインダーの中でづくりをしながら撮りますが、僕の場合は、これを撮っておいて、後でさっき撮ったヤツをここに入れようという感覚でづくりをしてゆくのです。

※ 注3 ル・マン24時間＝毎年6月にフランスのル・マン市で開催される伝統的な自動車耐久レースのこと。24時間走り続け、走行距離を競う。ドライバーの技術や体力、マシンの速さ、耐久力など、様々な要因がそろわなければ勝つことができない過酷なレース。毎年世界中から注目を集める、ヨーロッパ最大級のモータースポーツイベントとなっている。

取材時に頼れる『仕事のカメラ』と仕事の合間の『癒しのカメラ』

先生が、長年ニコンを愛用して下さっている理由というのは何ですか？

写真を撮るにはやっぱり使い慣れたものが一番なんです。僕の場合ニコンであれば、どこにどのボタンがあるのか、というのを指が覚えているんですね。シャッターボタンの上に人さし指が自然に置かれ、ファインダーを覗いたままでもダイヤルを回したり設定を変えたりすることができる、これができないと分秒を争うようなチャンスに対応できません。取材となると失敗できませんから、慣れていないカメラでは怖くて使えません。たとえどんなに優れた最新機種が出ましたと言われても、写すときにポケットから取り扱い説明書を出して読まなくてはいけないようであれば、僕にとってそのカメラは落第なんです。

写真を撮る道具として、ニコンのカメラが一番使いやすいということですね。

そうです。あと、僕にとってカメラは癒しの機械でもあります。原稿のしめきりが迫ると、どんどん逃避願望が出てくるんですよ。仕事の合間にふとカメラを引きずり出してきて、一緒に地図帳と時刻表を眺めながら「ああ、ここ。このあたりはいま、ちょうど桜が満開だよ」とか言いながら思いを馳せるんです(笑)。今度はこのカメラであれを撮りにいこう、これを撮りにいこう、そんなことをぼんやり考えながらカメラをいじっているときが一番幸せなんじゃないかな。ちょっと消極的な感じですけどね。

そんなとき手にするのはデジタルカメラですか？ それとも銀塩カメラですか？

そうですね、やっぱり銀塩カメラですね。銀塩カメラにはタイムスリップの面白さがあると思うんですよ。カメラを構えた瞬間というのは、これを撮りたい！ っていうすごい興奮状態にありますよね。カメラはその状態を確かに切り取ってくれる。でも、その写真を実際に見るときには、その興奮が冷めた状態なんです。その時間差があるのが面白いんですよね。20年後に見ると、また違ってくるでしょうね。それが写真自体の面白さじゃないかとも思います。

デジタルカメラの場合は、撮ったその場で写真が見られますね。

別にデジタルカメラを否定するわけではないんですよ。ただこれからは、銀塩カメラとデジタルカメラ、それぞれの役割が違ってくると思うんです。写真家でも、アマチュアでも、“写真”という作品を作る意識を持っている人たちは銀塩カメラを使い続けていくと思います。でも仕事として使う“写真”を撮るためのカメラであれば、デジタルカメラのほうがはるかに便利だと思います。

先生にとっては、デジタルカメラは仕事のカメラ、銀塩カメラは癒しのカメラという位置付けになるわけですね。

仕事のときには「やっぱりデジタルは便利だよ」と言っておきながら、次の瞬間には「また復刻版が出たらどうしよう」とつぶやきつつ、せっせとS3を磨いている(笑)。この使い分けのバランスが僕にとっていいんでしょうね。

これからも是非、ニコンのカメラとともに多くの作品を生み出してってください。楽しい作品を期待しています！ 本日はどうもありがとうございました。



[> コンテンツトップへ戻る](#)

※掲載している情報は、コンテンツ公開当時のものです。